

志波姫町文化財調査報告書第1集

御駒堂遺跡

平成17年2月

志波姫町教育委員会

序 文

広々とした田園地帯の広がる志波姫町は、古くから人々が住みつき、その豊かな自然環境の中で生活を営んできたことは、数多くの埋蔵文化財があることでも明らかであります。

これら先人が残した貴重な遺跡の多くは、土中に埋没し発見されないままになっていますが、近年の急激な社会情勢の変化に伴う土地開発等により滅亡の危機に瀕しております。

このような事態を未然に防止し、文化財の保護に万全を期すためには、その所在や価値を広く一般に知っていただく事が重要だと考えられます。

本書は、御駒堂浄水場拡張事業に伴い、平成14年度に実施した「御駒堂遺跡」の発掘調査をまとめたものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明に資するところとなれば大きな喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書を発刊するにあたり、多大なるご指導、ご尽力を賜りました宮城県教育庁文化財保護課の皆様方、地域関係各位に対しまして衷心より感謝申し上げますとともに、今後、ますますのご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成17年2月

志波姫町教育委員会

教育長 尾形淳一

例　　言

1. 本書は、志波姫町御駒堂淨水場拡張事業に伴う御駒堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は志波姫町教育委員会が主体となり、宮城県教育局文化財保護課が担当した。
3. 本書における土色の記述には『新版標準土色帖』(小原・竹原1973)を利用した。
4. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25000地形図「金成」「築館」を、第2図は志波姫町発行の1/2500志波姫町都市計画図X-O E64-3・4を複製して使用した。
5. 本書中の座標値は旧日本測地系に基づいており、国土座標第X系による。
6. 本書の遺構は、種別にしたがって以下の記号を使用した。
　　縦穴住居跡：S I　　溝跡：S D　　土器埋設遺構：S X
7. 本書は調査を担当した調査員の協議を経て、吉野　武が執筆・編集した。
8. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は志波姫町教育委員会が保管している。

目　　次

序文

I. 遺跡の概要と周辺の環境	1
II. 調査の経緯と経過・方法	2
III. 発見した遺構と遺物	4
IV.まとめ.....	10

調　　査　　要　　項

遺跡名：御駒堂遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号49014）

遺跡記号：B J

所在地：宮城県栗原郡志波姫町堀口御駒堂

調査主体：志波姫町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間・面積：1次調査 平成13年 3月26日～3月28日 確認調査1300m²

2次調査 平成14年10月15日～10月18日 確認調査110m² 事前調査250m²

調査員：1次調査 阿部博志、佐久間光平、引地弘行、稻毛英則

2次調査 阿部博志、後藤秀一、佐久間光平、吉野　武、稻毛英則

I. 遺跡の概要と周辺の環境

御駒堂遺跡は宮城県栗原郡志波姫町堀口御駒堂に所在する(第1図)。宮城県北部の中央に位置する志波姫町の地形は、北側が迫川とその支流によって形成された沖積地、南側が奥羽山脈から東にのびる築館丘陵となっており、沖積地と丘陵部の間には迫川に沿って南西から北東に段丘が発達している。遺跡は志波姫町の南西部に位置し、北側が沖積地に面した段丘上に立地する。遺跡の範囲は段丘の縁辺に沿って長さ約1.5km、幅約0.4kmと広く、北東端は宇南遺跡に接している。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	御駒堂遺跡	墓塚	後漢~近世	20	雪野塚跡	城跡	中世	30	小山遺跡	散布地	縄文・古代
2	治城跡	城跡	後漢・後魏・6世紀・7世紀	21	唯羅塚跡	城跡	弥生・奈良・平安	31	高田山遺跡	散布地	縄文・古代
3	阿敷谷御道跡	散布地	縄文・中・晚・古代	22	元町遺跡	散布地	古代	41	原田山遺跡	墓塚	縄文・古代
4	下段跡	城跡	中世	23	大門遺跡	城跡	後漢・平安・中世	42	矢内原餘遺跡	集落	縄文・奈良・平安
5	上段跡	城跡	平安	24	竹ノ内遺跡	散布地	後漢・古代	43	木戸平川遺跡	散布地	縄文
6	篠塚原大墓群	墳丘墓	古墳時代	25	八幡塚跡	城跡	元代	44	木戸遺跡	集落	縄文・古代
7	田中塚跡	城跡	中世	26	祇園塚跡	城跡	古代	45	櫛沢遺跡	集落	縄文・後・古代
8	豪沢B遺跡	窓跡?	散石堆	27	日良庭跡	城跡	中世	46	萩原塚跡	城跡	中世・近世
9	豪沢A遺跡	散石堆	古代	28	鶴谷塚跡	集落	後漢・古代	47	小合跡	城跡	不明
10	中寺遺跡	散石堆	古代	29	山ノ上遺跡	集落	後漢・古代	48	照越台遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
11	利堅敷道跡	散石堆	縄文・古代	30	元木遺跡	散布地	後漢・魏・漢・後漢	49	玉坂台遺跡	散布地	縄文・中・晩・古代
12	利堅跡	城跡	中世	31	一ノ宮遺跡	散布地	縄文	50	五倉貝塚	貝塚・廻路	縄文前・期・後・後世
13	利堅丘陵遺跡	散石堆	縄文・古代	32	二ノ宮遺跡	散布地	縄文	51	葛食郡	城跡	中世
14	内原駒道跡	散石堆	縄文・古代	33	西浦遺跡	散石堆・竪穴	後漢・中世	52	涌山山脚跡	城跡	中世
15	吹付遺跡	墓塚	古代	34	青吉遺跡	散布地	古代	53	平岸跡	城跡	中世・近世
16	猪ノ丸遺跡	墓塚	城跡	35	新原山遺跡	古墳前	54	原日保	貝塚	縄文・古墳	
17	宇摩遺跡	墓塚	城跡	36	張籠城跡	城跡	中世・近世	55	豊田把跡	古墳地・城跡	縄文・中世
18	大佐古跡	円墳	古墳時代	37	月下原下遺跡	散布地	縄文・古代	56	元町遺跡	散布地	縄文・古代
19	通穴遺跡	散布地	古代	38	鎌倉城跡	城跡	室町				

第1図 御駒堂遺跡と周辺の遺跡

本遺跡では昭和51年と昭和53年に東北自動車道建設に伴う発掘調査が行われており、奈良・平安時代に大規模な集落が営まれていたことが明らかになっている(小井川・小川1982)。なかでも、8世紀前半頃の集落の性格については、堅穴住居跡から多数の関東系土師器が出土し、カマドの特徴も関東地方の住居跡に類似することから関東地方からの移住が指摘されており、本遺跡は陸奥国における律令制支配の拡大を考えるうえで現在も重要視されている。

周辺には奈良・平安時代の遺跡が数多く存在する。本遺跡の北2.5kmにある伊治城は、8世紀中頃に律令政府が東北地方經營のために設置した城柵の1つであり、宝亀11年(780)に起きた伊治公麿麻呂の乱の舞台として著名である。これまでの発掘調査で政庁の位置や規模・構造等が判明しており、また、全体としては政庁・内郭・外郭の三重構造をとることが明らかになっている(宮城県多賀城跡調査研究所1978~1980、築館町教育委員会1988~2001)。なお、伊治城の北2kmには伊治城周辺一帯の支配者層の墓とみられる肺歎横穴墓群がある。

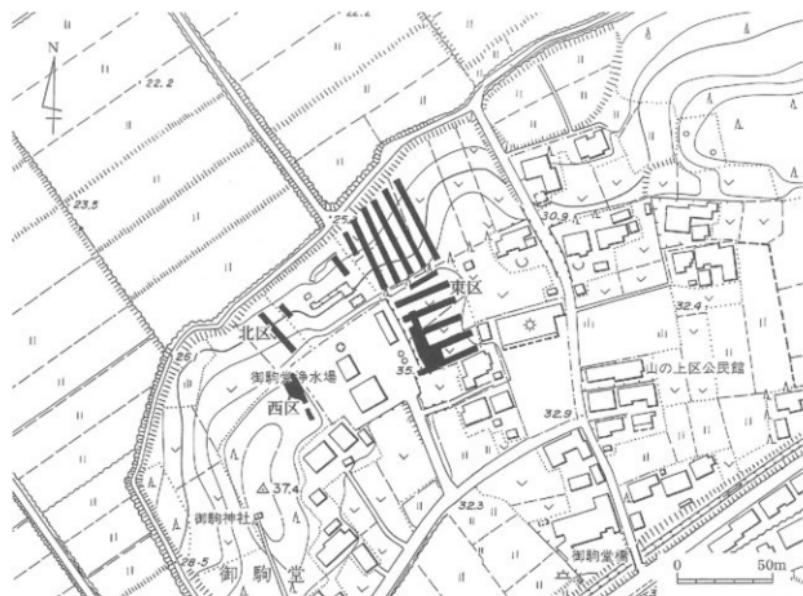
集落跡では山の上遺跡、宇南遺跡、大門遺跡、糠塚遺跡、淀遺跡、佐内屋敷遺跡、原田遺跡、嘉倉貝塚、長者原遺跡で発掘調査が行われている。このうち本遺跡のすぐ南にある山の上遺跡(手塚1980)の堅穴住居跡では関東系土師器が出土しており、カマドも関東地方のものに類似する特徴がみられる。本遺跡の東5kmにある糠塚遺跡では奈良・平安時代の堅穴住居跡が多数検出されている(小井川・手塚1978)。その大部分は奈良時代に属しており、出土土器は宮城県北部における国分寺下層式の土器の基準資料となっている。また、遺跡の範囲が広大なことから同期の大集落の存在が予想されている。生産遺跡では本遺跡の東3kmに孤塚遺跡がある。奈良時代の須恵器の窯跡であり、その製品は伊治城をはじめ、周辺の集落に供給されていた可能性が考えられている。

II. 調査の経緯と経過・方法

経緯と経過: 発掘調査は、志波姫町上下水道課が行う御駒堂浄水場拡張事業に伴うものである。この事業にあたっては対象地が御駒堂遺跡に含まれることから、埋蔵文化財とのかかわりが問題となつた。そこで、計画の提示をうけた志波姫町教育委員会及び宮城県教育庁文化財保護課では、志波姫町上下水道課と協議を行い、まず対象地内における遺構の分布や密度を把握するための確認調査を行うことにした。

確認調査は平成13年3月に実施した(1次調査)。対象地は既存浄水場の東・西・北側(以下、東区、西区、北区と呼称)の畠地・杉林で、対象面積は7800m²である。このうち西区は杉林の伐採が不十分なため、後日改めて調査することにした。東・北区の調査は幅2mのトレッチを15本設定してを行い、東区で堅穴住居跡、井戸跡、土器埋設遺構を検出した(第2・3図)。そのため関係者で再協議を行い、遺構保存のために建物の位置を変更することにした。また、遺構とのかかわりを避けられない道路部分については、2次調査として記録を目的とした事前調査を行い、同時に西区の確認調査もすることにした。

2次調査は平成14年10月15日~18日に実施した。その結果、事前調査部分の東区で古代の堅穴住居跡を1軒検出したが、大部分が道路対象地外に広がり、掘削もされないことから床面までの精査に留



第2図 調査区の位置

めた。一方、確認調査部分の西区では古代以降の溝跡を検出したため、協議を行い、遺構は保存されることになった(第2・6図)。

方法：調査区内の層序は、I層が厚さ10~20cmの黒褐色(10YR3/2)の表土、II層が厚さ10~40cmの黒色(10YR2/1)シルト層、III層が橙色(7.5YR6/6)シルトの地山で、遺構の検出はIII層上面で行った。検出した遺構は平・断面図作成と写真撮影により記録した。平面図は旧日本測地系の国土座標第X系による座標軸を基準線とし、縮尺は1/20・1/100・1/300を併用して作成した。断面図の縮尺は1/20である。写真撮影には35mmサイズのカラーリバーサルとモノクロフィルムを使用した。

III. 発見した遺構と遺物

1・2次調査を通じて東区で古代の竪穴住居跡、井戸跡、土器埋設遺構、西区で古代以降の溝跡を検出した。遺物は土師器・須恵器・鉄製品が整理用平箱で2箱分出土している。以下、これらの遺構と遺物について、東区と西区に分けて述べる。なお、上記の遺構以外に東区で溝跡や土壤、小規模な掘立柱建物跡を検出したが、形状や規模、方向に斉一性や規則性が認められず、また、その堆積土や周辺からは磁器茶碗、陶器皿・鉢・土瓶・甕、硯が若干出土した(図版3-8、図版4-1~3)ことから、それらは近世以降の遺構とみられる。

1. 東区

竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、土器埋設遺構1基を検出した(第3図)。

《竪穴住居跡》

検出した6軒のうち、全体形を把握し、床面まで精査したのはS I 1住居跡のみである。その他は工事との支障がなく、保存されることから平面的な確認に留めている。

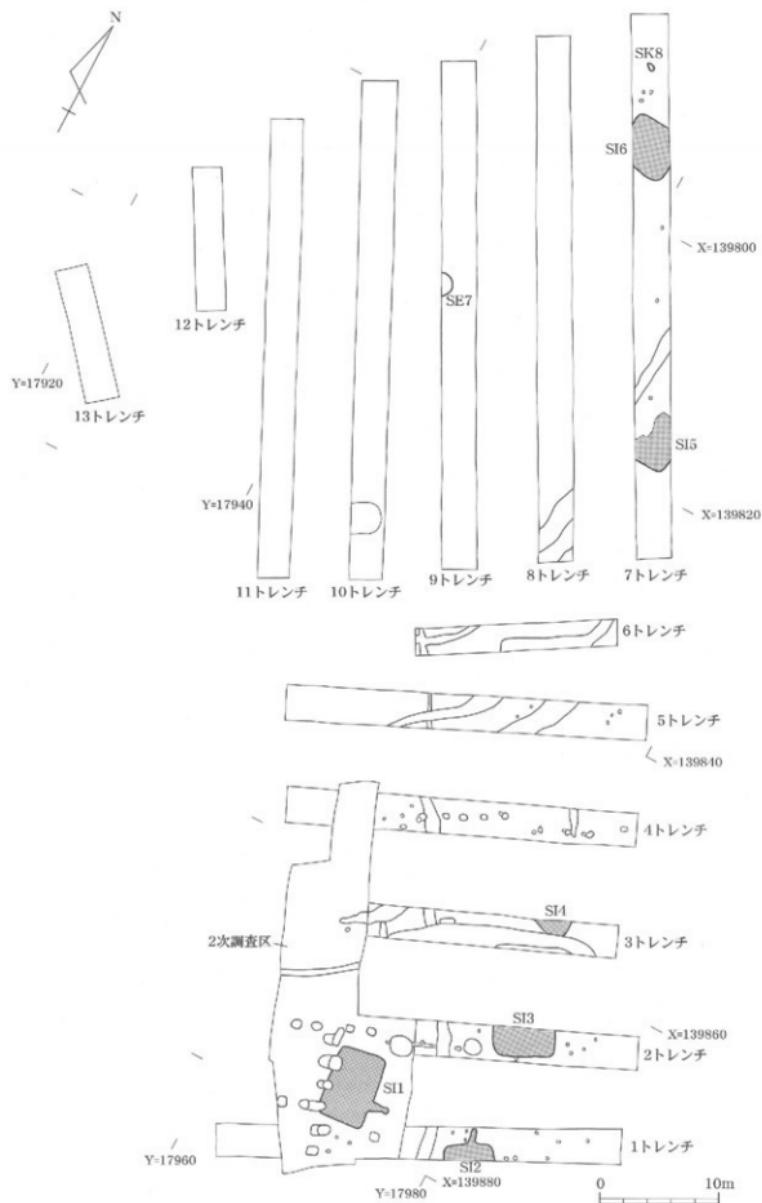
住居跡の平面形は方形で、規模は一辺4.0~6.5mとみられる(第3図)。カマドはS I 1・2住居跡で確認しており、S I 1住居跡では東辺、S I 2住居跡では北辺に付設されている。方向は、真北に対し6~30° 西に振れるもの(S I 1~4住居跡)と、8~10° 東に振れるもの(S I 5・6住居跡)とがある。堆積土は黒色や黒褐色(10YR2/1・3/1)のシルトが主体で、S I 3・5・6住居跡では上面に灰白色火山灰が堆積が認められた(図版2)。遺物は、後述するS I 1住居跡以外では、S I 2住居跡の堆積土から上師器甕(第5図6)が出土している。以下、精査したS I 1住居跡について述べる。

【S I 1住居跡】(第4・5図)

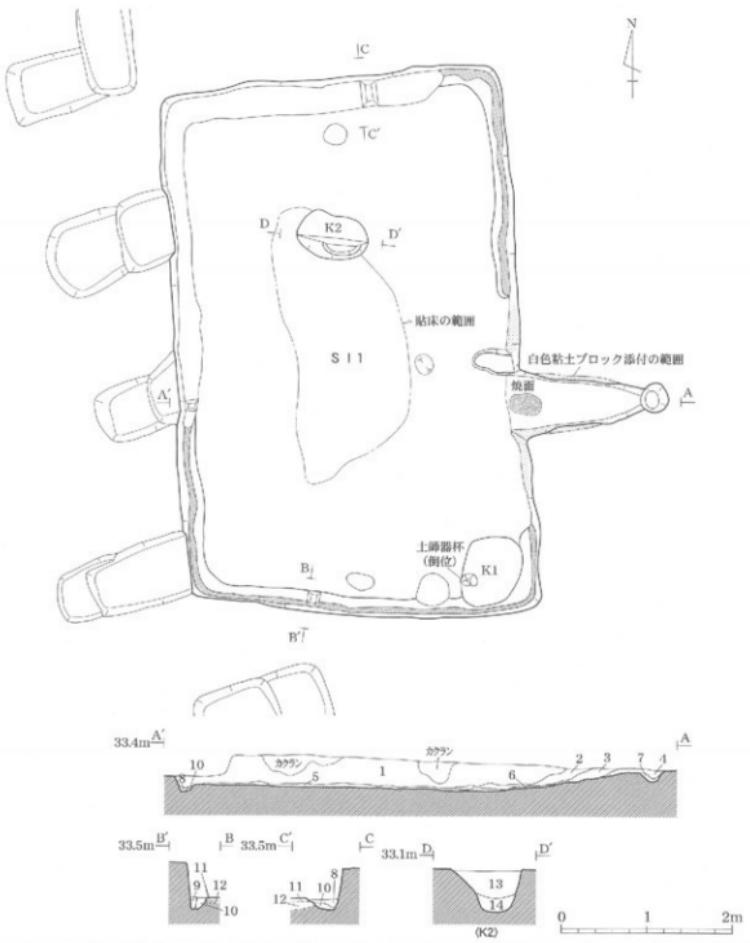
平面形は東西4.0m、南北6.4mの長方形で、方向は西辺でN-6° -Wである。壁は床面からやや斜めに立ち上がる。高さは残りのよい西壁で40cmある。堆積土は小さい地山土ブロックを含む黒色シルトの自然流入土である。床は中央部が地山、それ以外は地山土ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土の上に、厚さ2~3cmの明黄褐色粘土を貼りつけて床面としており、ほぼ平坦である。主柱穴は認められない。

カマドは東辺中央のやや南寄りに付設されている。燃焼部側壁は左側が残るのみで、白色粘土ブロックを多く含む褐灰色粘土で構築されている。燃焼部底面は煙道部に向かって上向きにやや傾斜し、そのまま煙道に続く。火熱のため全体に暗赤褐色に変色している。煙道は長さ1.8m、幅25~80cmで、先端に向かって細くなり、径35cm程の円形に掘り込まれた煙出し孔に続いている。底面は煙出し孔に向かって上向きにやや傾斜する。煙道のカマド側は特に硬く焼き締まり、赤色に変色している。なお、カマド周辺の住居壁面と煙道壁面には、カマド側壁と同様の白色粘土ブロックを多く含む褐灰色粘土が貼り付けられており、住居壁面では長さ60cm、高さは床面から最大で23cm残っていた。煙道壁面では左側で末端から長さ120cmほど貼り付けられているのが確認された。

周溝は東辺のカマドとその周辺を除いて全周するとみられる。幅は15~25cmで、深さは南辺で14cmあり、地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。東・南辺と、西辺の南半では壁



第3図 東区の遺構

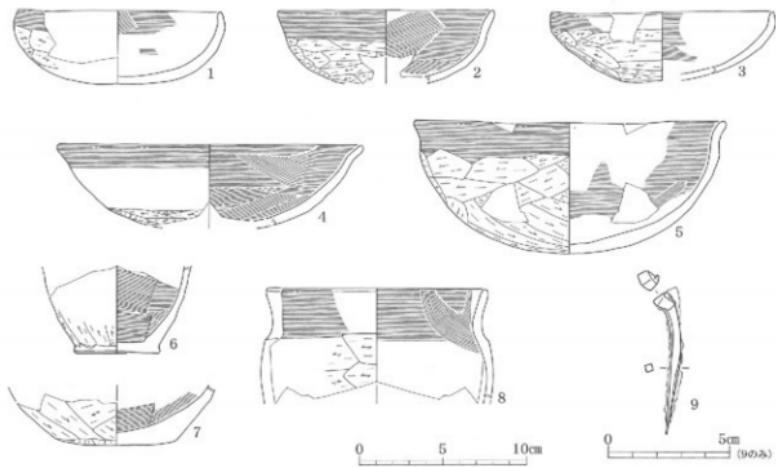


第4図 S11住居跡

材痕跡とみられる幅5cmの黒色シルトの堆積土が認められた。一方、西辺の北半と北辺では壁材が抜き取り溝の幅は20~30cmで、堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトである。

その他の施設としては貯蔵穴状ピットが床面南東隅(K1)と中央部北側(K2)にある。K1はカマドからみると右側にあり、長軸90cm、短軸65cmの楕円形で、白色粘土ブロックや地山ブロック、焼土粒を

No.	主色	土性	調入物などその後の特徴	参考	No.	主色	土性	調入物などその後の特徴	参考
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	小さい地山上ブロックを含む 住居堆積土上		8	赤色 (7.5YR4/4)	シルト	地白土ブロックを不均質に多く含む 壁接続部	
2	にじみ黄褐色 (10YR4/3)	粘土	白色粘土ブロックを多く含む カマド堆積土上		9	黒色 (10YR2/1)	シルト	壁材直隣	
3	褐褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地土粒と灰粉を多く含む		10	灰黃褐色 (10YR5/2)	シルト	小さい地山上ブロックを多く含む 削離土	
4	褐褐色 (7.5YR3/1)	シルト	地土粒を少し含む	壁道堆積土上	11	明黃褐色 (10YR6/0)	粘土	黒色土ブロックを含む 馬廐	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	比較的均質な層	住居堆積土上	12	褐褐色 (10YR3/1)	シルト	地白土ブロックを含む 築り方理土	
6	褐褐色 (10H4/4)	粘土	上面に薄い炭化物層が詰りつく カマド堆積土上		13	黒色 (10YR2/1)	シルト	K2堆積土	
7	にじみ褐色 (7.5YR5/4)	シルト	黒褐色土ブロックを不均質に含む 壁道ピット堆積土上		14	にじみ黄褐色 (10YR5/3)	シルト	K2堆積土	



第5図 S I 1・2住居跡出土遺物

含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。K2は長軸85cm、短軸50cmのやや不整な橢円形で、深さは45cmである。断面形は逆台形で、西側の傾斜は上半が緩く、半ばから急になる。堆積土は下層が地山ブロック主体の黄橙色シルト、上層が黒色シルトで、下層は人為的に埋め戻されている。

遺物は床面から土師器壺・甕、須恵器壺、カマド燃焼部底面と煙道底面、K1埋土から土師器壺・甕、堆積土から土師器壺・甕、須恵器甕、鉄釘が出土している。主体をしめるのは土師器であり、須恵器は破片資料がごく少量出土したのみである。土師器はすべて製作にロクロを使用しないもので、壺の特徴をみると、器形は丸底で内湾しながら立ち上がり、口縁部が短く内傾するもの、直立するものの、外反するものがある(第5図1~5)。外面は底部から体部はヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整で、内面はナデ調整が施されている。甕には頸部外面に段が巡るものがある(8)。胴部外面は横方向のヘラケズリ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。また、底部から胴部にかけての資料には、胴部外面に斜め方向のヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整が施されたものがある。

〔年代と性格〕 遺物の主体をしめる土師器壺は、内面がナデ調整されたものである。こうした壺は、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理される在地のものとは異なり、関東系の土師器壺であることが東北自動車道建設に伴う本遺跡の調査で明らかにされている(小井川・小川1982)。また、外面に横方向や斜め方向のヘラケズリ調整された土師器甕も関東系のものとみられている。S I 1住居跡出土土器はこのような関東系土師器を主体とし、他に在地の土師器・須恵器を若干含むものであり、その様相

は先述の本遺跡の調査で設定された第1～5群土器のうち、第2群上器にあたる。第2群土器の年代は8世紀前半頃とみられていることから、S I 1住居跡の年代はその頃と考えられる。

ところで、関東系土師器は律令制支配の拡大にあたり、坂東から陸奥に移住した人々に関わるものとみられている(小井川・小川1982、今泉1989)。また、それを出土する堅穴住居跡のカマドについても関東地方に系譜をもつもの(関東型カマドと呼称)があることが指摘されている(小井川・小川1982、村田・丹羽1992、村田2000)。関東型カマドには、燃焼部が住居の壁付近もしくは壁外に位置する、住居の壁を掘り込んで構築し、本体の素材には白色粘土が使用される等の特徴があり、燃焼部が住居内にあり、本体が黄褐色粘土やシルトで構築されて、煙道が住居外に細長くのびる在地のカマドとは構造や構築方法が異なる。S I 1住居跡のカマドをみると、燃焼部は壁外にあり、本体は白色粘土ブロックを多く含む粘土で構築されている。また、煙道と住居の壁との境付近は、横幅がやや広くなっている。煙道が長いことや、本体すべてに白色粘土が使われていないことから関東型カマドそのものとはいえないが、少なくともその影響は認められる。こうしたカマドを持つことや、先述した関東系土師器の出土からみて、S I 1住居跡は移民と関わりを持つものであったと考えられる。

《井戸跡・土器埋設遺構》

各1基を検出した。ともに工事との支障がないことから平面確認に留めている。以下、概要を述べる。

【S E 7井戸跡】(第3図)

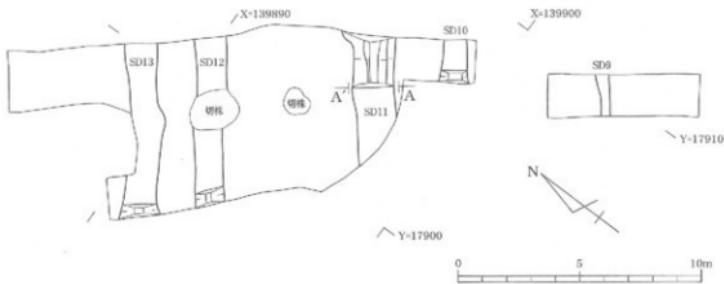
1次調査9トレンチで検出した。平面形は径2.0mの円形である。上面には灰白色火山灰が厚く堆積している(図版2)。遺物は出土していない。

年代は、上面に灰白色火山灰が堆積することから10世紀前葉以前と考えられる。

【S X 8土器埋設遺構】(第3・7図)

1次調査7トレンチで検出した。合わせ口にした土師器甕を横にして埋めたものである。掘り方の平面形は長軸90cm、短軸50cmの橢円形で、埋土は地山ブロックを多く含む黒色シルトである。埋設された土師器甕は製作にロクロを使用したもので、検出時に上面で採集された1点を図化した(第7図)。口径20cm、器高30cmを越える長胴形の大型品で、外面下半は縦方向のヘラケズリ調整、内面下半はナデ調整されている。

〔年代と性格〕製作にロクロを使用した土師器甕が使われているので、年代は本遺跡の第5群土器にあたる平安時代と考えられる。また、合わせ口にした土師器甕を横にして埋めた平安時代の遺構は筑館町佐内屋敷遺跡、高清水町手取遺跡に類例があり、甕棺墓とみられている(森1983、早坂・阿部1980)。その類例と遺構の平面形や規模、埋設土器の特徴・年代がほぼ同じであることから、SK 8土器埋設遺構も甕棺墓と考えられる。



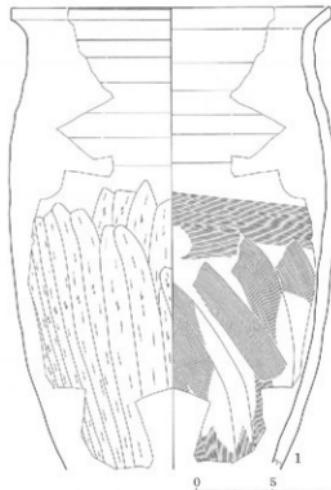
第6図 西区の遺構

2. 西区

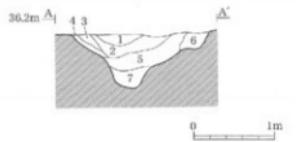
ほぼ平行する北東から南西方向の溝跡5条を検出した(第6図)。方向は真東に対して北に約40° 振れている。幅が1.0~2.2mの広いもの(S D10~13)と、0.4~0.5mの狭いもの(S D9)がある。前者の一部を掘り下げたところ、深さは0.4~0.7mであった。断面形は、途中に段がみられるS D11(第8図)以外はU字形である。後者のS D9も含めて、堆積土は地山土の粒を含む黒褐色シルト主体の自然流入土である。遺物は、S D11の堆積土から土師器の破片が1片出土している。

年代は出土遺物から古代以降とみられる。ただし、溝跡の堆積土は黒褐色シルトを主体とするものであり、黒色シルトを主体とする先述の住居跡や井戸跡、土壤とは異なる。方向も住居跡と大きく相

違している。したがって、古代以降でも住居跡等とは異なる年代と思われる。なお、これらの溝跡については平行して延びていることから道路側溝の可能性も考えられるが、調査区が狭いため、断言はできない。ここでは可能性をあげるに留めておきたい。



第7図 S X 8土器埋設遺構出土土器



No	土色	土性	混入物などその他の特徴
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山土粒を多く含む
2	褐色 (10YR2/1)	シルト	地山土粒を少し含む
3	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	地山土粒を含む
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	小さい地山土ブロックを少し含む
5	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山土粒を多く含む
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	小さい地山土ブロックを多く含む
7	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	地山土粒を含む

第8図 S D 11溝跡断面図

IV. まとめ

1. 1・2次調査を通じて、東区で竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、土器埋設遺構1基、西区で溝跡5条を検出した。遺物は土師器・須恵器・鉄製品が出土している。
2. 精査を行った S I 1住居跡は8世紀前半頃のものとみられる。出土した土器は関東系の土師器壊・甕を主体とし、カマドも関東地方に系譜をもつカマドの影響が認められることから、関東地方からの移民と関わりを持つ住居と考えられる。
3. その他の遺構は平面確認に留めている。住居跡の平面形や堆積土の特徴は S I 1住居跡とほぼ同様で、灰白色火山灰の堆積が認められるものもある。出土した土器も東北自動車道建設時の調査における第1~5群上器(7世紀末~9世紀以降)の範疇に収まることから、8・9世紀を中心とした頃の住居とみておきたい。井戸跡についても灰白色火山灰が堆積することから、同じ頃のものと思われる。土器埋設遺構は平安時代の豪族墓と考えられる。
4. 溝跡は古代以降のもので、住居跡などとは異なる年代の溝跡とみられる。性格については道路側溝の可能性もある。

《引用・参考文献》

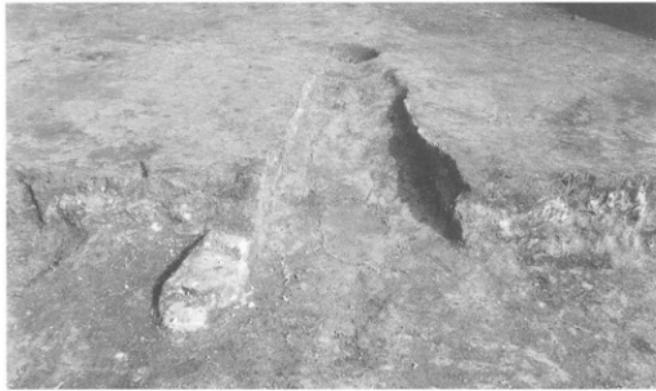
- 今泉隆雄 (1989) : 「8世紀前半以前の陸奥国と坂東」『地方史研究』第221号
- 小井川和夫・小川淳一 (1982) : 「御駒室遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集
- 小井川和夫・手塚 均 (1978) : 「難波遺跡」『宮城県文化財発掘調査報告(昭和52年分)』宮城県文化財調査報告書第53集
- 築館町教育委員会 (1988~2001) : 『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第1~14集
- 手塚 均 (1980) : 「山ノ上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1978~1980) : 『伊治城跡 I ~ III』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3~5回
- 村田兄一 (2000) : 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺 一移民の時代ー」『宮城考古学』第2号
- 村田晃一・丹羽 浩 (1992) : 「東山遺跡VI」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第17回
- 森 貢壽 (1983) : 「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第93集
- 早坂春一・阿部 恵 (1980) : 「手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集



2次調査東区全景 (S E→)



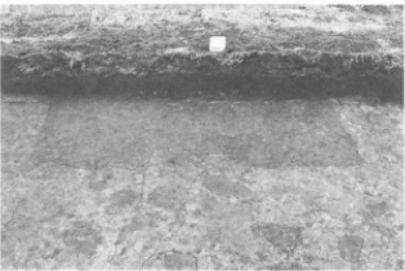
2次調査 S I 1住居跡 (W→)



2次調査 S I 1住居跡カマド (W→)



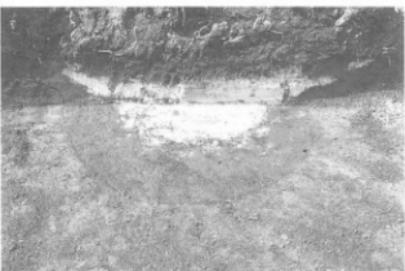
2次調査S I 1住居跡西辺周溝断面 (N→)



1次調査1トレンチS I 2住居跡 (NW→)



1次調査7トレンチS I 6住居跡 (S→)



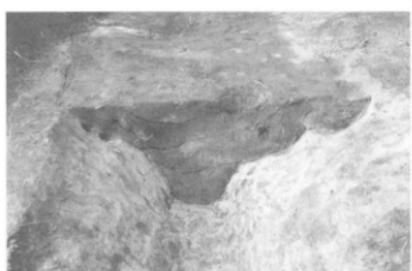
1次調査9トレンチS E 7井戸跡 (NE→)



2次調査西区北側全景 (NW→)



1次調査2トレンチ全景 (SW→)



2次調査S D 11溝跡断面 (NE→)



1



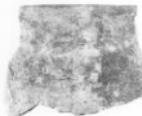
2



3



4



5

1

6



7



8a

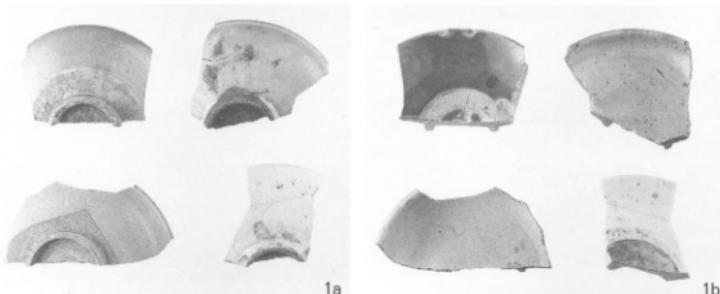


8b

出土遺物1

1 : 第5図1 2 : 第5図2 3 : 第5図3 4 : 第5図4 5 : 第5図5 6 : 第5図6

7 : 第7図 8 : 磁器(茶碗)



1a

1b



2

3

出土遺物 2

1：陶器（皿） 2：陶器（土瓶、甕、鉢） 3：硯

報告書抄録

ふりがな	おこまどういせき							
書名	御駒堂遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	志波姫町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	吉野 武							
編集機関	志波姫町教育委員会							
所在地	〒989-5614 宮城県栗原郡志波姫町新原139 電 0228-25-3231							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○.○'○"	東経 ○.○'○"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御駒堂遺跡	宮城県栗原郡 志波姫町堀口 御駒堂	045292	49014	38度 44分 20秒	141度 7分 22秒	20010326~ 20010328 20021015~ 20021018	1,660	御駒堂淨水場拡張事業に伴う確認・事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
御駒堂遺跡	集落跡	奈良 平安	堅穴住居跡6、井戸跡1、土器埋設遺構1、溝跡5		土師器、須恵器、鉄釘	奈良時代の堅穴住居跡から関東系土器が出土。関東地方からの移民と密接に関わる集落とみられる。		

志波姫町文化財調査報告書 第1集

御駒堂遺跡

印 刷 平成17年2月16日

発 行 平成17年2月28日

発行 志波姫町教育委員会
宮城県栗原郡志波姫町新原139

印刷機 小野寺印刷所
宮城県栗原郡栗館町伊豆一丁目7-3

